

瀬戸内海の航路整備で 生まれた海駅のシンボル

さんのせがんぎ

三之瀬雁木



広島県呉市

下蒲刈島は広島県呉市の南東方に位置し、古くから紀行文に登場していますので、海上交通の要衝として栄えたことが推察できます。また、三之瀬は潮の流れの複雑さも有名で、東方、西方、南西方から流れてくる潮の3つが三之瀬の瀬戸で合流したことからこの名で呼ばれるようになったそうです。江戸時代には、幕府の全国統一にともなって、航路は整備され、要所に海駅が設けられました。芸備両国では鞆（福山市）とともに三之瀬が海駅でした。

この航路は、西国大名の海路による参勤交代や長崎奉行の江戸への連絡、そしてオランダ、琉球使節、朝鮮通信使の往来に利用されていましたが、瀬戸内海の中央を抜けていく沖乗り航路が発達すると、弓削島、御手洗などに風待ち、潮待ちの港ができ、新たな町が栄えていきました。

関ヶ原の役後、安芸・備後両国の藩主となった福島正則に、幕府から瀬戸内海航路に沿う本陣、番所、茶屋を備えた海駅の整備が命じられました。豊臣秀吉の朝鮮出兵によって一時中断した国交が、慶長12年（1607）徳川家康によって回復されたのです。正則に命じられた海駅の整備はちょうど第1回目の朝鮮通信使を迎える時期と重なります。

福島雁木ともいわれる三之瀬の長雁木は、この頃つくられました。当初は、今の場所より少し前方に垂直に築きましたが、一夜のうちに潮流によって流され、崩壊しました。このため、再び築くにあたり中ほどに折れ目を入れることによって成功したとされています。

朝鮮通信使は江戸時代12回来日しており、そのうち11回は往復共に三之瀬に寄港して一泊しています。第8回の来日時はすでに、正則から受け継いだ浅野氏が接待役を勤め、135隻の舟と接待役付き759人を三之瀬に用意しています。この時、通信使たちは島へ上陸する際、長雁木を使って宿館である上のお茶屋へ移動したとの史料が残ります。

雁木は初め11段、113mでしたが、昭和になって地盤沈下などが発生し、上部に付け足されて14段になっています。長さは埋め立て工事により現在56mになっていますが、主要部分は現役で近世の面影を伝えています。



今も生活に息づく三之瀬雁木（呉市下蒲刈町）

■位置図



三ノ瀬の瀬戸を借景として建つ松涛園。左が復元された蒲刈島御番所。右後方が蒲刈大橋。



漆喰の白壁に連子窓の豪壮な造り、往時の繁栄ぶりが偲ばれる。（呉市豊町御手洗）



平成3年の台風19号で被災後、復元整備された千砂子波止（呉市豊町御手洗）